日本列島
病院探訪
全国の特徴ある
病院を取材する
〝フォルテ〟

“FORTE”

社会医療法人 三樹会
三樹会泌尿器科病院
Sanjukai hospital

尿路結石治療のパイオニア 新病院オープンでさらなる高みへ

Interview_ドクターズマガジン編集部　Text_横井かずえ　Photograph_船戸俊一

進

三樹会泌尿器科病院を漢字一文字で表すと

これまでの伝統を基礎とし、より良い医療のため現状に甘んじず、常に“進歩”する。そしてさらなる発展を目指し次のステージに“前進”したいと考えています。

雄大な自然に囲まれ、海の恵みも豊かな北海道。約8万3450㎢と日本の総面積の約2割以上を占め、東北6県と新潟県を合わせた広さと同等の面積を有している。医療環境では医師の大半が札幌市に集中。人口10万人当たりの医師数が全国平均を上回っているのは、札幌医療圏や旭川市のある上川中部医療圏などごく一部のみで、広大な地域の中で医師の偏在が顕著なのが現状だ。

そのような地理的特色を持つ北の大地で1978年、道内初となる泌尿器科専門病院として産声を上げたのが社会医療法人三樹会三樹会泌尿器科病院だ。40年以上にわたりわが国の泌尿器分野をリードし続け、来春には新病院のグランドオープンを控える同院の佐藤嘉一理事長・院長に課題と展望を聞いた。

1 泌尿器科単科病院として全国最多の99床

「三樹会」という名称は、創業者である丹田均氏、加藤修爾氏、大西茂樹氏の3医師になぞらえて命名されたものだ。3人の医師でスタートした同院は、今では泌尿器科単科病院としては全国最多99床の病床を持つまでに成長した。

泌尿器科・放射線科・麻酔科を標榜し、9人の泌尿器科専門医が在籍。対象とする疾患は尿路結石、前立腺肥大症、悪性腫瘍、勃起不全（ED）、男性更年期障害、腎不全など泌尿器科疾患の全領域をカバーする。

写真提供：三樹会泌尿器科病院

特に尿路結石治療においては、1984年には大学病院などに先駆けて、日本で初めて体外衝撃波結石破砕装置（ESWL）を導入した。それまでは保存的治療や開腹手術が主であった尿路結石において、新たな治療の道を開いたパイオニアである。

ESWL導入以降、現在まで1万6000例の腎臓結石や上部尿管の結石に対して、非侵襲的な治療を行ってきた。現在では最新のESWL砕石装置を導入し、より効率的な結石治療を実施する他、尿管鏡を用い、経尿道的に結石を砕く手術（TUL・f-TUL）を年間400例以上行っている。

大きな腎結石に対しては、経皮・経尿道的同時砕石術（ECIRS）を年間約20例行っており、単独の治療法あるいは複数の治療法を組み合わせることによって、安全で効率的な治療を提供している。

近年増加している前立腺肥大症については、内視鏡的にレーザーを用いて前立腺を核出する手術（HoLEP）を年間100例以上実施。頻尿（過活動性膀胱）・失禁など排尿の悩みにも、さまざまな薬剤治療で対応している。

また、腎臓、膀胱、前立腺、精巣など泌尿器科領域の悪性腫瘍に対しては、腹腔鏡による根治的手術や化学療法、分子標的薬など、最先端かつQOLを重視した治療を実施する。

「北海道における初めての泌尿器科専門病院として、北海道、ひいては日本における泌尿器科領域のトップランナーとなるべく、日々、努力を続けています。特に尿路結石に関しては、幅広いハイリスク症例が道内全域から紹介されてくるため、全症例に丁寧に対応していくことが使命だと考えています」

2 オンラインツールを活用し 地域医療を支援

まだ男性更年期障害が世に広く知られる前の2002年から専門外来を設けるなど、男性更年期障害や勃起不全の領域でもわが国をリードしてきた。佐藤院長も研究分野として性機能や男性・女性問わず更年期障害の問題に取り組んでおり、現在は日本性機能学会の副理事長と国際性機能学会の理事を務めている。

2021年には日本で世界性機能学会がオンライン開催され、佐藤院長らはその誘致に関わった。

「更年期障害は中高年男性のQOLに関わる非常に重要な疾患の一つです。当院は早くから専門外来を開き、勃起不全や男性更年期障害に対して高度で専門的な治療を行える体制を築いてきました」

この他にも病院開設から40年以上が経過し、多様化する患者ニーズに対応するためにさまざまな試みを行っている。例えば短期間で退院が可能な患者に対しては、引き続き入院日数の短縮に取り組む一方で、がんのエンドステージなど比較的長期に及ぶ入院が必要なケースにも対応できるよう、短期と長期の双方に対応できる体制を目指す。

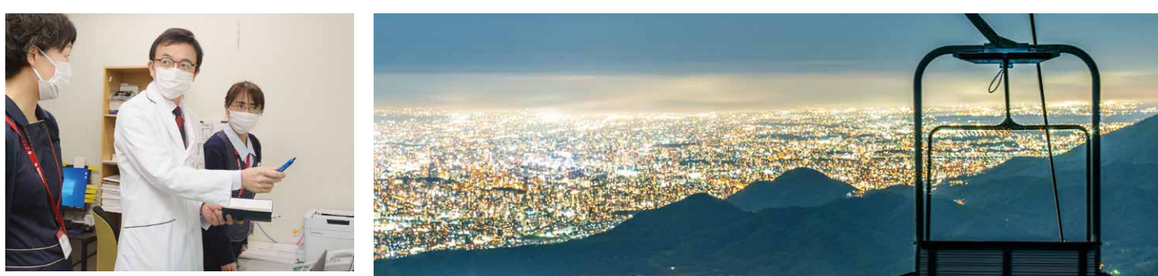
広大な面積を持つ北海道では、医師の偏在や医療環境の地域格差が著しい。そこで、地域の医療格差を少しでも解消するために、同院ではオンラインツールなどを用いた地域医療支援にも力を入れている。具体的には、泌尿器科専門医が不足する地域を対象に、医師を派遣したり医師同士の無料オンラインサポートを展開する。

「これまでも利尻島や稚内などの遠隔地から紹介されてくる患者さんがいましたが、『専門医がおらず現地で泌尿器科を受診するには数カ月待ち』というのです。その間、痛みをこらえてつらい思いをしているという話も聞きました。ならば、われわれが出掛けていく、あるいはオンラインでつなぐことによって、より多くの患者さんを救うことができるのではないかと考えたのです」

すでに昨年から利尻島などの病院とZOOMや遠隔医療システムを活用し、協力体制を構築している。

また、遠隔地に住んでいたり、高齢で通院が難しい患者、COVID-19に感染することを恐れ、通院での受診が心配な患者などを対象に、積極的にオンライン診療も運用している。オンライン診療をはじめとした、ICTツールを使った診療に対する患者からの評判は上々だ。

「現地の医師と当院の専門医が画像データなどを共有することによって、対面と同等のクオリティーの診療を提供することが可能です。患者さんからはこうした試みによって『待ち時間が短くて助かる』『画面越しではあっても、顔を見ながら診察を受けられるので、対面とほとんど変わらない』などと歓迎されています。オンライン診療によって腫瘍が見つかり、その後、手術につながった例もあるなど、病気の早期発見、早期治療につながっていると実感しています」



手稲山から見た札幌の夜景

社会医療法人 三樹会
三樹会泌尿器科病院
〒003-0002 北海道札幌市白石区東札幌2条3-6-10

3 新病院をグランドオープン 移転を機にビジョンを刷新

2023年春には新病院のグランドオープンを予定する。移転先は現病院の向かいで、RC構造5階建て、延べ7070㎡。病床数は個室の増床を勘案し19床減の80床となる。

新病院はハード面では全道から集まる患者に対応し、より多くの手術や治療ができるように手術室の拡充や通信環境を整備。診察室と手術室は3部屋から4部屋へ増やし、人工透析ベッドも9床増の30床になる。

病棟ではフリーWi-Fiなど患者の利便性や過ごしやすさを重視した改良を実施。高齢者に対しては退院前のリハビリの希望にも対応できるよう配慮する。

また、手術支援ロボット「ダヴィンチ」も導入予定だ。急性期医療を充実させるためのハード面の整備に加え、大切にしているのは「患者に寄り添う」という医療者としてのマインドだ。

「最先端の治療技術を追求する一方で、患者さんに寄り添うという医療者としての心構えを忘れてはならないと肝に銘じています。寄り添うというのは具体的にいうと、患者さんの立場に立って、病状や治療の説明を丁寧に行い、心から安心して治療を受けてもらうことだと考えています」

新病院移転に併せて病院として最も大切にするコアバリューをブラッシュアップし、ハードとソフトの両面からさらなる飛躍を目指す。

「新病院への移転を契機に、ビジョンも刷新し、新たなフェーズへと進んでいく考えです」

研修については、さまざまな大学や地方から医師が集い、切磋琢磨できる環境を目指す。

「若手医師の育成に当たっては、1カ所からだけではなく、幅広い施設から来ていただくのが理想。それによって互いに異なる流儀に触れ『なぜ、そうなるのか』と考えることが成長につながるからです」

さらに、学んだことをしっかり評価する体制が重要であると話す。

「それぞれの先生たちが学んだことをきちんと評価し、そのうえで論文などの目に見える形にまとめていくことが大切だと考えています」

新病院への移転やビジョンの刷新、オンライン診療の拡充など、日々進化し続ける三樹会泌尿器科病院。その視線の先にあるのは全て患者の幸せだ。

「新病院のオープンやICT化、ビジョンの作成を通じて目指しているのは、患者さんの幸せです。われわれが挑戦することによって1人でも多くの患者さんが健康になったり、満足感や安心感を感じることができれば、医療者としてこれ以上の喜びはありません。三樹会病院の礎を築いた3人の創設者の思いを継承し、未来を見据えてさらなる高みへと病院を発展させていきたい――それがわれわれの使命であり、最大の願いでもあるのです」